

## はじめに

ご紹介をいただきました須磨千頼<sup>ちかひ</sup>でございます。よろしくお願い致します。

ただいま西池理事長からお話下さいましたように、私が長い間かかってなんとかまとめることができた『賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究』という書物が、今年度の日本学士院賞・恩賜賞授与の対象に選ばれることになりまして、6月14日（月）に上野の日本学士院で、天皇・皇后両陛下ご臨席のもとで授賞式がございました。受賞者はそれぞれ自分の研究内容を3分間で両陛下にご説明するようにとあらかじめ指示されておりまして、900頁の研究を3分間でどうやってお話しすればよいのだろうと思って、大分困りました。3分という時間で一体どれだけお話しできるのか、やっぱりへまをやるといけませんので、それ相応に一応原稿を作りましてお話し上げたのですがすけれども、説明の途中から天皇陛下が「この筋は畦道ですか」というようなことに始まっていろいろ質問をされたものですから、こちらで用意しておりました内容は途中でどこかへ逸れていってしまったというようなことになりましたし、また後に当日のビデオテープを送っていただきましたので、それを見ておりましたら、両陛下へのご説明の中で、私が「15世紀」というべきところをうっかり「14世紀」といってしまい、それに続けて「その1世紀後の16世紀半ば」などといっていたことが判りました。これでは何の事やら判りません。そういうとちりをやってしまった場面もあって申し訳なかったのですがすけれども、ともあれなんとか済んで、賞状その他をいただいて帰ってまいりました。

そのようないわくがありまして、授賞式に先だって4月の11日（日）には、理事長さん始め理事の方々が白河院にお集まり下さって、私のために祝賀会を開いて下さいました。その席には、田中宮司様からのご丁寧なお祝辞もたまわっております。そして、その席で、秋の祖先祭の時には出席して講演をするようにというお話を承っておりまして、何をお話しできるかは判りませんがとにかくそのつもりで参上するというお約束を致しました。私も同族会の一員に加えていただいておりますので、本日はそういう立場で参列致しますと共に、併せて皆様方にお話をする機会を与えられたという次第であります。

さて、本日の講演の内容でございますが、大体1時間くらいの予定ということですので、先ほど申しました3分というのと比べれば格段に多くの時間ではありますが、かといって、やたらに詳しいことを多く並べておりますと途中で時間が尽きてしまいます。おのずから限度がありますが、学士院賞受賞を機縁としてお招きをいただいたということでありますので、やはりまずはじめに拙著『賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究』の中で私が研究した内容をかいつまんでお話しさせていただくことにしまして、次にその研究の結果である諸郷の田地の復元図を利用するとどういうことが判るかという実例を幾つかご紹介すると

ということで責めを塞ぎたいと考えました。「室町後期の上賀茂」というテーマはいささか漠然としておりますが、その中身は要するにさようなことなのであります。

お手許に資料のコピーを10枚ばかり配っていただいておりますが、これは、実は学士院賞受賞の当日、両陛下をはじめ学士院会員の方々などにご覧いただくために作成した展示物、およびそれをもとに少し手を加えたものから成っております。3分間ではそのすべてを説明し切れませんから、ただ並べて展示しただけという資料が多く、本日はそれらのものについても予定時間の範囲内で説明をしながらご覧いただきたいと思います。また一方では、これらはすべて上賀茂の土地に関係するものばかりですから、今後何かのお役に立てていただく機会でもあれば幸いという思いもあります。資料には①から⑩までの番号が付けてあります。例えば「資料①を見て下さい」というふうに申しますので、該当のものを見ながら話を聞いていただければありがたいと思います。なお、配付のためのコピーは、賀茂県主同族会の役員の方々に時間を割いてやっていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

#### 検地帳記載内容の地図化の仕事

私の研究は、詰まるところ、中世になって「上賀茂社境内六郷」と呼ばれるようになったこの神社の膝元の神領のうち、小野郷を除く5か郷について、それら諸郷の室町・戦国期の検地帳（検地の結果を記録した土地台帳。中世では一般に検注帳といっており、近世になると検地帳といわれるのですが、内容にはさほど大きな相違がある訳ではなく、現に当神社の場合、天文19年<1550>の帳面では表紙に「検地帳」と書いてあります。それで私の話の中では検注帳とはいわないで、専ら検地帳の名称を使用致します）を利用して、当時の社領田地の在り方を一筆ごとに詳細に地図化することによって中世荘園の内部構造を究明しようとしたものといえます。5か郷の位置とか境界は資料⑥で確認していただきたいと思います。一乗寺・修学院の近辺から北は大原のあたりにかけて存在した小野郷の場合は、境内六郷の一つではありますが、田地が少なく、適当な史料も残っておりませんので、対象から外さざるを得ませんでした。

手短に申せば研究の内容はそういうことなのですが、それだけでは説明が簡単すぎて身も蓋もないことになってしまいますから、どうして私がそういう検地帳の地図化などということをやることになったのかといういきさつから始めて、もう少し詳しい話を聞いていただくことに致します。

まず、資料①をご覧ください。この史料は、賀茂の永清院（社家町の中にあった尼寺のようですが、位置は突き止めておりません）の等理・貞順という二人の尼僧が受け伝えた「別相伝」の私領である2反の田地を、五辻大宮の見性寺の宗善首座に対して、8貫文という値段（米に換算すると大体8石）で売り払った時の売券つまり売買証文であります。田地の在所が「小山郷流木後」と書かれています。日付は文明十一年六月十二日となっておりますが、これは例の応仁の乱が一応終わった翌年に当たります。この『大徳寺文書』に入

①

賀茂永清院尼貞順田地賣券

永代賣放申田地之事、

合貳段者、

在所小山郷流木後、本者御酒田、今者免除之也、

右件田地者、賀茂永清院之比丘尼等理貞順兩人之別相傳之私領也、雖然、依有要用、直錢拾捌貫文<sup>（マカ）</sup>、永代五辻大宮見性寺宗善首座、賀茂代々社務之下知狀、諸役免除之狀、前住玄理大師之讓狀、悉皆六通相副、賣渡申處實正明白也、等理大師者、去四月八日逝去迄、彼分在世之時借物、中蔭之間作善下行成也、為其當院主加判在之、於向後彼下地違乱輩出來者、為公方様、堅可有御罪科者也、年貢米壹段別仁石代也、正月御結鎮百文在之、諸公事免除上者、無役之地也、仍為後証賣券之狀如件、

文明十年六月十二日

貞順（花押）

院主

玄慶（花押）

『大日本古文書 大徳寺文書之一』五二二号

っている田地売券を私が初めて見たのは大学の3年の終りのことでした。文学部の国史学科に進学して1年経過しようとする時期で、履修科目の単位を取得するために試験を受けたり、レポートを書いたりする必要がありました。その時私は指導教官である實月圭吾先生の「古文書学演習」という科目を履修しておりましたが、その科目のレポートのテーマというのがこの売券だったのです。

そのころの私は1年かかって漸く穴だらけながらもなんとか古文書の筆写ができるようになったという段階の初心者でしたから、一体どうやればこの売券を題材にしてレポートが作成できるのか、いとぐちを見つけるのに困ってしまいました。それで、一緒に同じ科目を履修していて、同様にレポートを書くことになった1年あるいは2年先輩に当たる旧制大学の人たち（私は新制大学の1回生でした）のやることを傍で見ておきますと、先輩たちは、東大の史料編纂所に架蔵されている大徳寺関係あるいは賀茂別雷神社関係の史料の影写本を何冊も借り出してきて、その中から関係のある文書を探して筆写をやっておられました。それで私もまさに見様見真似で、ああこうやって史料集めをやるんだなということで、「大徳寺文書」あるいは「賀茂別雷神社文書」の中にある資料①と同類の売券とか

寄進状その他いろいろの史料をせっせと筆写して、それをもとにしてどうにかレポートを提出できたのです。

この時に筆写した史料の中に、資料②aに示した岡本郷地がらみ帳（写真は下坂守氏が撮影されたもの）を含む境内5か郷に関する宝徳3年（1451）の検地帳が入っていました（実際は宝徳3年当時の原本ではなく、明応9年<1500>に筆写されたものが遺っています）。ところが、私はこの時作成したレポートではほとんどまったくこの地がらみ帳を役立てることができませんでした。これを史料として生かす力量が当時の私にはなかったというのが正直なところですよ。

しかし、折角時間をかけて筆写したものですし、また、ご覧の通り中世後期の上賀茂神社の社領の内部を、隅々まで詳細に知ることができる史料ですので、このままではもったいない、これを使って何かできないだろうかと、その後取り出しては眺め、また取り出しては眺めを繰り返しておりました。そうこうするうちに私は、この地がらみ帳はなんとか地図化することができるのではなかろうか、現在の地図の上に狂いなく置けるような完全な形にはならなくても、ある程度の地図化ができれば、どういう土地がどこにあって、何という作人がその土地を耕作していたかというようなこと、あるいは往来田とか供御所田とか台飯田とかいうようないろいろな性格の田地がどういうふうに存在していたかといったようなことが掴める図面はなんとか作れるのではないかと、ということを考えました。

どうしてそんなことを考えたかと申しますと、例えば資料②aでは、田地を書上げている部分の最初に「一ノ坪ノ東ノ一」と記されていますが、これは「一ノ坪」という小字があって、そこの東の端から岡本郷の検地が開始されたことを物語っております。そして、あとは「次ノ西」「次ノ西」……というふうに書いてあって、田地を調査していく順序が西へ西へと進んでいたことが判ります。この「次ノ西」とかあるいは「次ノ東」「次ノ南」とかいう記載が、この検地帳ではほとんど全部の田地に一筆ごとに記載してあります。こういうのを私は方角記載と呼んでおりますが、全国的にはいろいろと中世の検地帳が遺ってはいますけれども、こういうふうに全体に涉ってびっしり方角記載が見られる例はないだろうと思います。この場合はまさに希有の例といってよく、私はこれを利用すればなんとか田地の図面が作れるだろうと考えたわけです。

この見込みを実行に移すことにした私は、まず画用紙を裁断して縦3cm・横4.5cmくらいの小さいカードを作り、その1枚ごとに検地帳の1筆ごとの記事を書きこんでいきました。宝徳の地がらみ帳5巻のほかに、その後に筆写したり、友人の成田瑞穂氏とか石井進氏の筆写されたものを貰ったりして手許に揃った享禄五年（1532）の岡本郷検地帳や天文十九年（1550）の諸郷検地帳（資料②bに岡本郷の例を掲げました）についても同様にやりましたので、総数は5,500枚近くになりました。そのカードを今度は方角記載に従って順番に並べていくのです。そうすると、ただ検地帳を眺めている場合とはもっと具体的な形で、いろいろな情報が頭に入ってきます。もう一度資料②aを見ていただきましょう。まず途中に小字名が書きこまれています。これは町名が詳しく記入してあ



②a 宝徳3年(1451)岡本郷地がらみ帳



②b 天文19年(1550)岡本郷検地帳

[illegible]

思古令  
榷地帳

仁者不立於方隅

天久十九庚辰

十一月十日

る地図と照らし合わせて、その小字名で括られる検地帳上の何筆かの田地群が地図のどのあたりに該当するのを探すときに、重要な手がかりになります。それから「溝極」とか「岸極」などという記載も同様に役に立ちます。8筆目の田地には「溝極、ソハウ」とありますが、これはこの田地が溝の際にあり、同時にここで小字が「ソハウ（祖芳）」に変わるのだということを物語っているわけですね。検地の進行方向からすれば、溝はこの田地の東側を通っていたことも明らかです。

そのようにして並べたカードが一つの小字単位程度の田地群の形をとってまとめると、次にはそれを方眼紙の上に一定の寸法で転載しました。そうすると一種の小字図が描けます。さらにその小字図というべきものの幾つかを、道や溝のつながり具合あるいは地図に遺る古くからの町名などを考慮して、連結できるものはつないでゆく。そうすると方眼紙の上の作業ではあるのですが、小字よりはさらに大きい範囲の一定区域の田地図ができることになります。

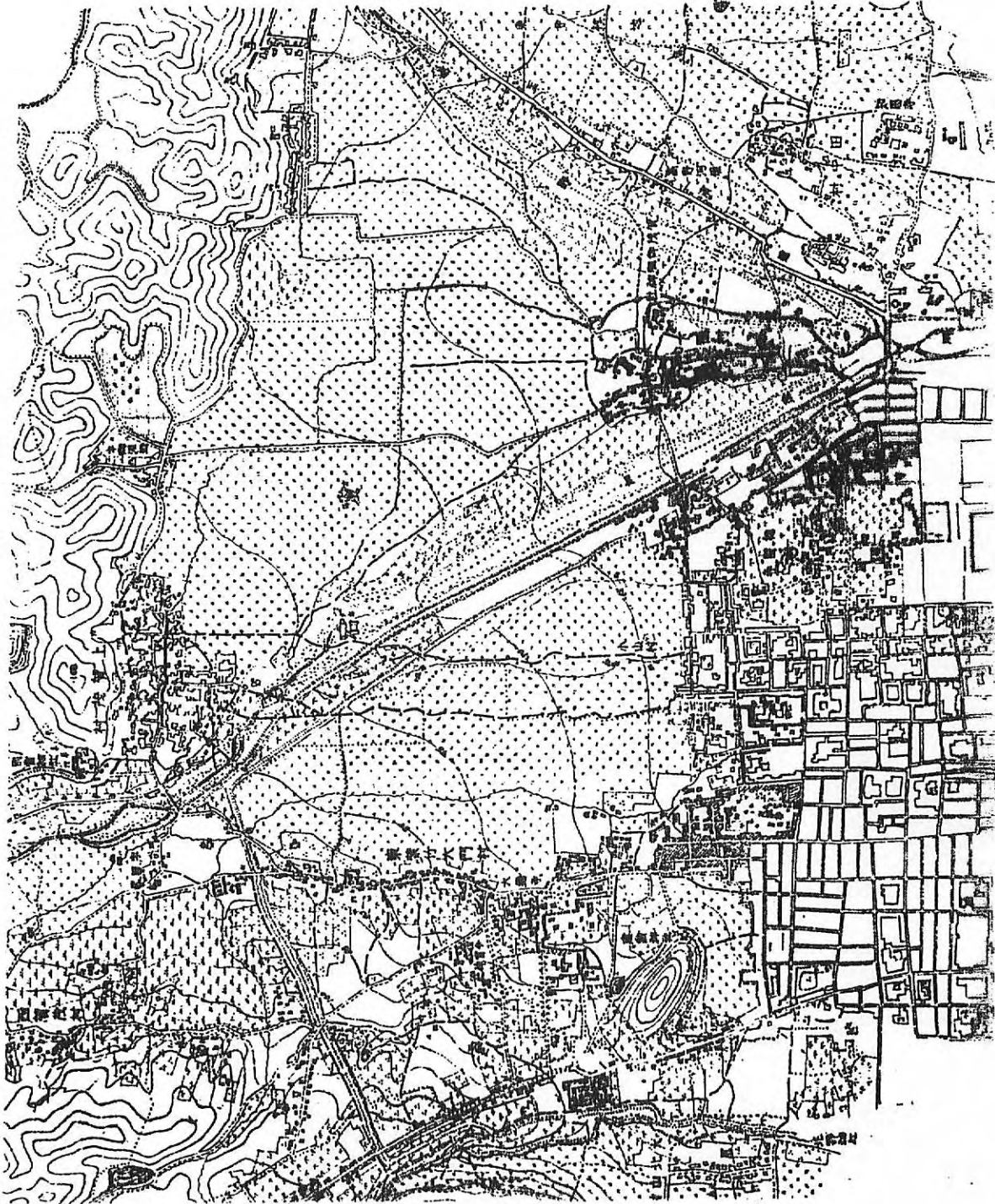
そういう作業をずっと続けまして、そのあげく岡本・大宮2か郷の主要部分については、割合スムーズに結果を出すことができましたが、傍ら該当地域と思われるあたりの地図をあれこれと見ておりますと、そのころの上賀茂の近辺では、まだ田圃がほとんど姿を変えずに残っている。それも中世どころか古代以来の条里制地割が大体そのままに保存されているのではないかと推測されたので、それを確かめるために、私は現地へ出かけることにしました。昭和33年（1958）の春だったと思うのですが、父のいとこの戸田保業さんのお宅に2、3日泊めていただいて現地を歩きました。その結果、私が方眼紙の上に作ったのとほとんどそっくりの状態での田地の地割が残っていることを確認できたのです。それは私にとってはとっても幸せな出会いだったといつてよいのです。本当に小躍りするほど喜んだことを今でも覚えております。

さて、そういうことになりますと、もう方眼紙の上に田地一筆ごとの区画を描いて検地帳の記事を書き載せていくという作業は、おそらく必要ではないだろうと考えられます。何故かといいますと、明治初期の地租改正に際して全国各地の村々で作成された地籍図が、たぶん利用できるであろうからです。地籍図がどういうものかという例は資料④・⑤をご覧ください。資料④の方は「大字上賀茂地籍全図」の一部で、資料⑤はその地籍全図の中の「第十八番字一坪」に該当する区域の字限図（字切図）と呼ばれるものです。こちらでは田地一筆ごとの区画や面積などが詳細に判ります。これらをひっくるめて地籍図と称しておりますが、これが今に至るまで市役所とか町役場あるいは法務局などに保存されております。そういうことは教わって知っておりましたから、それをどこかで見せていただいて筆写して利用することができれば、それに直接検地帳の記事を記入していけばよいことになるのです。

ちょっと資料③を見て下さい。これは、右側に書き込みましたように、明治22年（1889）に測量して同25年に発行された縮尺2万分の1の京都の地図です。但し、ここに掲げましたのは、私が大学院生であったころに、寶月先生が、勤務しておられた史料編

### ③ 大日本帝国陸地測量部二万分の一「京都」

(明治三二年測量、同二五年製版、同年三月二九日印刷、但し須磨のトレースによる複製)





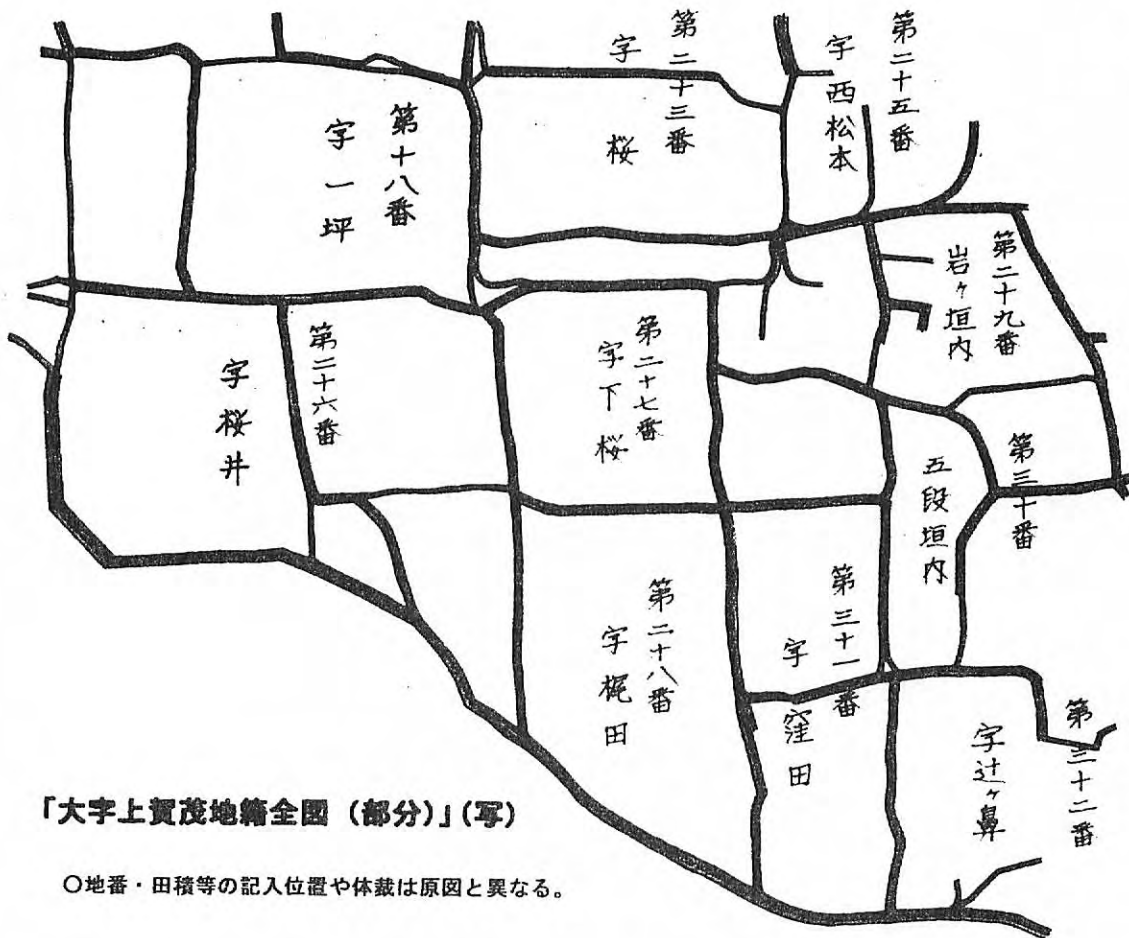
纂所の古文書室で、「掃除をしていたらこんなものが出てきた。役に立つかも知れない」と言って貸して下さったものを、万年筆の先とか丸ペンなどを使ってトレーシングペーパーに写し取ったもののコピーです。古い時代の地図だから自分で購入するわけにはいかない。古本屋の店先あたりで偶然にも見つけて手に入るということはあるかも知れないけれども、それはもう満天の星の中で名も知れぬたった一つの星を見つけ出すようなもので、とても考えられることではありませんでした。それで写真は一応撮りましたが、原寸のものとなるとトレースする以外にないと思ってそういう面倒なことをやりました。欠点はいろいろあるでしょうが、一応役には立つと思います。それはさておき、この地図によりますと、上賀茂社境内の5か郷に相当する地域は、当時まだほとんど全域が田地であったことが判ります。ということは、先ほど見ていただいたような明治初期の田地の様相を示す地籍全図とか字限図とかいうものは、それが保存されているところへ行けば、ほぼ5か郷全体について見るができるだろうという予測を可能にするわけです。

そこで、私はこの時戸田さんの奥様のご案内をいただいて、まず法務局の上賀茂出張所へ行って、上賀茂地域の字限図を筆写させていただきました。資料④・⑤はそれを下敷きにして作成したものです。字限図を地籍全図に即して繋ぎ合わせていけば、詳細な田地の白地図ができあがることになります。先ほど見ていただいた資料⑥は、5つの郷の全域についてそういう作業をやり、その結果を大分後になってから繋ぎ合わせて仕上げた地図であります。そのための地籍図閲覧ではさらに京都市の路政課や北区役所などのお世話になったのですが、ともかくそういう地図を作成して、田地の区画一つずつに検地帳の一筆ごとの記事を書き込んでいけば、そこには室町後期の上賀茂の地域の詳細な景観が浮かび上がってくることになる。そういう見込みで、休み休みでしたけれども少しずつ作業を進めていった次第です。

この復元図作りの過程では、さまざまな縮尺の地図を何枚も何枚も作成する必要がありました。地籍全図は凡そ1, 200分の1という縮尺になっていますから、例えば南北に長い河上郷の場合ですと、原図のコピーを比べると1畳半ほどにもなります。これではいちいち上げたり巻いたりを繰り返す場合たいへん不便です。そこで、手頃な大きさにして使おうということになると、1, 800分の1とか3, 000分の1程度の縮尺で、場合によってはもっと小さく収まるように描き直しをする必要があります。例えば先ほどの資料⑥の地図は、5か郷全体を俯瞰できるように、もともとは約8, 000分の1の縮尺で描いたものです。お配りしたものは、原図を幾つかの部分に分けてスキャナを使って縮小コピーし、それを継ぎ接ぎした上でまたコピーしたという代物です。今はそうしてパソコンとスキャナを使えばごく簡単に希望の縮尺の地図を作ることが出来るのですが、私がこの研究に取り組んでいた時期には、そういう便利なものは使えませんでしたから、例えばある地図を半分の縮尺で描き直そうということになると、まず原図の上に2cm間隔くらいの方眼野を引いたトレーシングペーパーを置いて、動かないように固定し、他方1cm間隔の方眼野を引いた別の紙を作り、両者を対応させて、後者の方に1枳ずつ原図と相似形



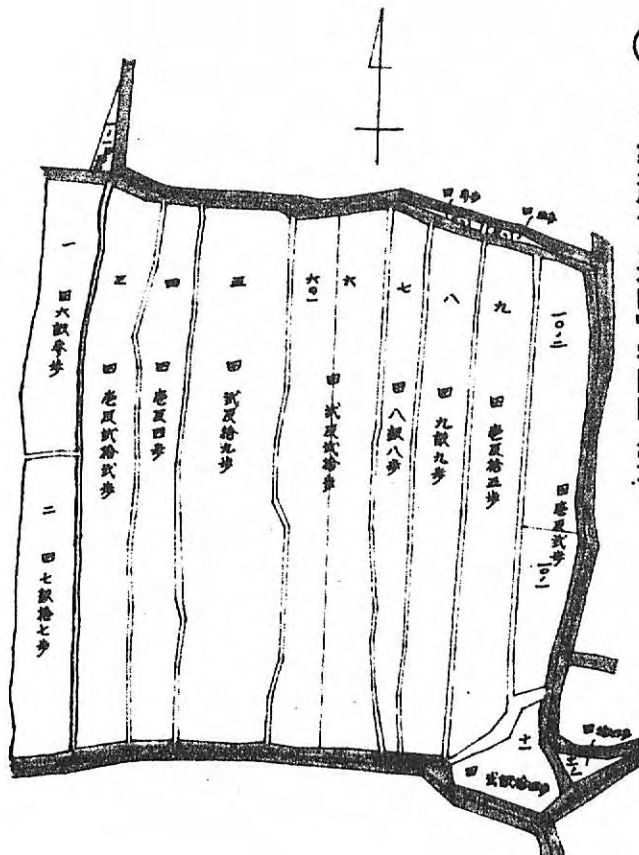
④



「大字上賀茂地籍全圖（部分）」(写)

○地番・田積等の記入位置や体裁は原図と異なる。

⑤



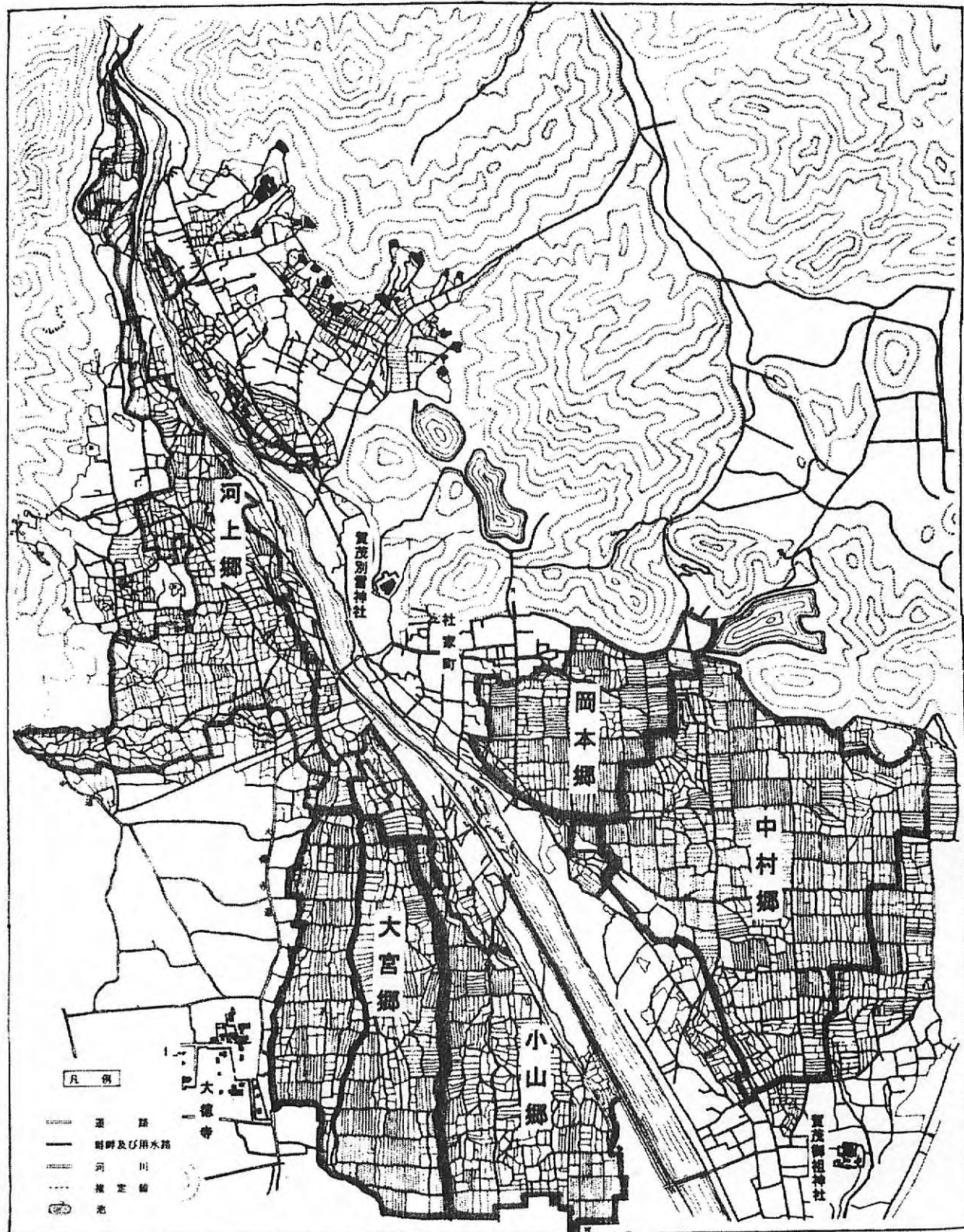
「上賀茂一ノ坪町」字図 (写)

になるように道とか溝の線を描きこんでいくという作業を避けて通ることは出来ませんでした。ですから地図を描くだけでたいへんな時間を費やしたわけでありました。念のためにトレースした図面の複本をとっておく必要もありました。河上郷の地籍全図の複製を作った時には、私の娘がまだ幼稚園児のころでしたが、「ちょっと写すのを手伝ってくれ」と言いましたら、身体が小さいものですから、トレーシングペーパーの上に身体ごと乗っかって、赤と青の鉛筆を使って一部分を筆写してくれたという思い出があります。

こうして復元図を完成させていく作業は、比較的楽に進め得たところもありますし、逆にもうお手上げだと思われたような箇所も少なくはありませんでした。資料⑥の地図を見ますと、岡本郷とか中村郷とかいうところは、一部に乱れはあるものの、大体においてきわめて整然たる碁盤目状の地割が施されていることが確認できます。これは古代以来の条里制地割が明治初期まで（事実数十年前まで）ずっと長く壊されずに伝えられてきたことを物語っているのですが、こういうふうに田地が整然たる並び方をしている場所ですと、先ほどの岡本郷一ノ坪の例でも明らかなように、起点さえ確認できれば、あとは「次ノ西」「次ノ東」あるいは「次ノ東」「次ノ西」という方角記載に従って順番に一筆ごとの記事を当てはめていけばよいわけで、途中で一筆の田地の区画を2等分とか3等分とかする必要がでてくることもありはしましたが、ともかく比較的楽に地図化をやれたのです。ところが、例えば河上郷の西南部の辺りとか同郷の北部、あるいは小山郷の主として南端部などでは、水流によって乱されたり、あるいは初めから条里制地割がなかったりというようなことで、そう簡単にはいきませんでした。資料⑥で河上郷西南部付近の地割を見ますと、例えば粘土を適当に丸めてアトランダムに積み上げたような具合に田地が並んでいます。こういうところでは「次ノ西」「次ノ東」とかいっても、それが必ず真西とか真東を指しているとは限らない場合があります。第一起点がどの田地かがなかなか掴めません。また小山郷南端部などは、江戸時代にすでに市街地化していたため、田地の字限図も存在しませんから一層作業は難しいことになりました。一步間違えれば、ボタンの掛け違いと同じことで、全部が狂っていきます。そのため私は書いては消し書いては消しを繰り返して、さんざん翻弄され、あげくにもうここは復元を諦めねばならないかも知れないと思い、長らく放置していたところが何か所もありました。

しかし、勤務先が定年になって、自由に使える時間が多くなり、一方では私もそろそろ命がお終いになる年頃になっているわけですから、今やらなければどうしようもないと思って、定年を過ぎて1年ほど経ってから、いわば放置状態であったこの研究の完成を目指すことにしました。復元が難しいところばかり後に残していたわけですから、そう簡単には壁を破ることができず、ずいぶんと悪戦苦闘をやらねばなりませんでした。そのあげくに、最終的にはまあ90%くらいは正確であるといってもよいと思える5郷の復元図を完成させることができたのであります。一つの例として資料⑦に天文19年の大宮郷検地帳復元図の北半部を掲げましたのでご覧下さい。復元図作りの詳しい過程は著書に記しておりますので、興味がおありでしたら読んでいただければ幸いに存じます。私の研究の根幹

# ⑥ 賀茂別雷神社境内諸郷耕地図



郷界は宝徳3年諸郷地がらみ帳による。



⑦ 天文19年大宮郷検地帳復元図 (部分)



部分は、この5郷復元図の作成であります。著書をまとめるに当たっては、別に復元図作成のもとになった検地帳のすべても翻刻して掲載し、さらにこの研究の結果として明らかになった約400に及ぶ上賀茂近辺の中世地名について、蒐集した限りの史料によって解説を致しております。

#### 復元図を利用して明らかに出来たこと若干

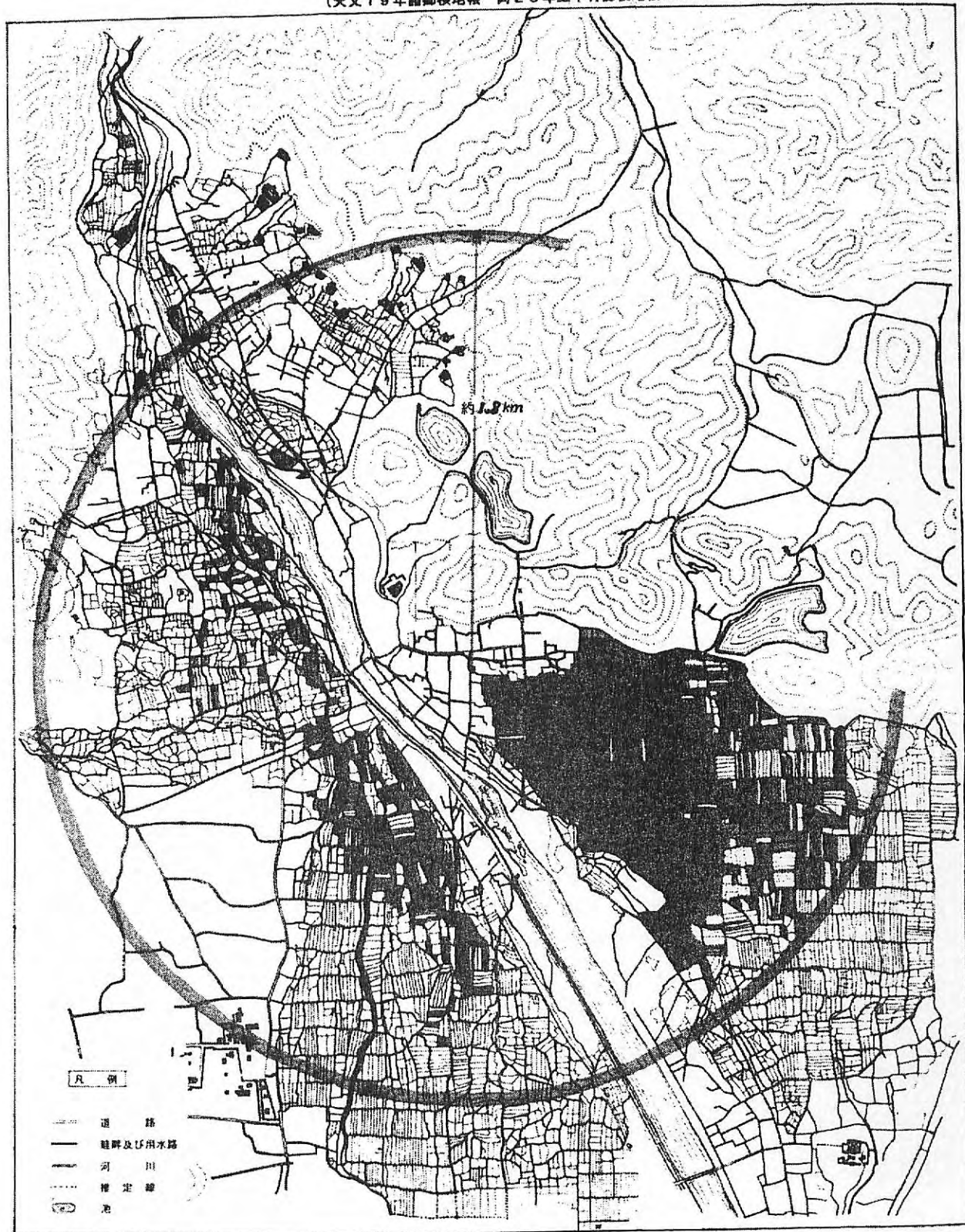
さて、これで私の研究の概要はほぼお話してきたと思うのですが、本日は残った時間を使って、もう少し聞いていただきたいことがあります。それはこの復元図を利用すると例えばどういうことが判るかということです。

そこで、まず資料⑧を見ていただきたいと思います。これはタイトルの下に書いておきましたが、天文十九年の諸郷検地帳と翌天文二十年の上中村郷検地帳と両方を利用して作成したものです。この天文十九・二十年の検地帳では、一筆ごとの田地の作人の住所がほとんど網羅的に判明します（小山郷の一部を除く）。実例として、資料②bをもう一度見て下さい。これは岡本郷の検地帳ですが、左側に掲げた記載例では、最初に「一ツホ」という小字が出てきて、以下資料②aにある宝徳の地がらみ帳の記事と同様に「次ノ西」「次ノ西」……と田地が並んでいます。両者が対応するように掲載したのですが、それはさておき作人名の欄を見ますと、最初の一筆には「中」の「二郎兵へ」、その次には「梅」の「さ衛門二郎」というふうに記されています。この「中」というのは「中大路」、「梅」は「梅ヶ辻」の頭文字です。終りから2行目には「池」とありますが、いうまでもなくこれは「池殿」のことです。同様の実例は資料⑦の復元図をみれば多数確認することが出来ます。そういうことで、どこに住んでいた何という人（作人）がどこに田地を持っていたかということがほとんど判ってしまうのです。ですから復元図が全部出来てしまえば、その状況をいちいち地図の上で的確に指摘できることになります。そのことを社家町に住んでいた作人層について調べて色分けをしてみたのがこの図です。これに依れば、岡本郷の郷域がほとんど全部社家町居住作人層の作田で占められていたことがはっきり判り、さらにその周辺では上中村郷とか大宮・小山両郷北部あるいは河上郷の東部・北部域に涉って彼らの作田が分布していたことを捉えることが出来ます。それで、これが實際上どれくらいの範囲に収まるのかということを知るために、地図の上で大雑把に見当を付けると烏帽子ヶ垣内町の北部あたりが大体社家町の真ん中に当たりそうだと見て、そこを中心にして約1.8kmの距離を測って円を描いてみますと、ご覧のようになります。これで社家町居住作人層の作田は中心から凡そ1.8kmないし2kmくらいの範囲にほとんど入ってしまうということが証明できたことになります。河上郷北部では、一部だけはみ出しが見られますけれども、この区域に作田を持っている人たちは、大抵社家町西端部の山本町とか池殿町の居住者ですので、これは実質的にはあまり大きなみ出しとは考えられません。

このような状況から判断すると、天文の検地帳に記載されている作人層は、原則として直接耕作者であったとみてよいだろうと私は考えております。もし直接耕作者でなかった

# ⑧ 上賀茂社家町居住作人層作田分布図

(天文19年附郷検地帳・同20年上中村郷検地帳による)





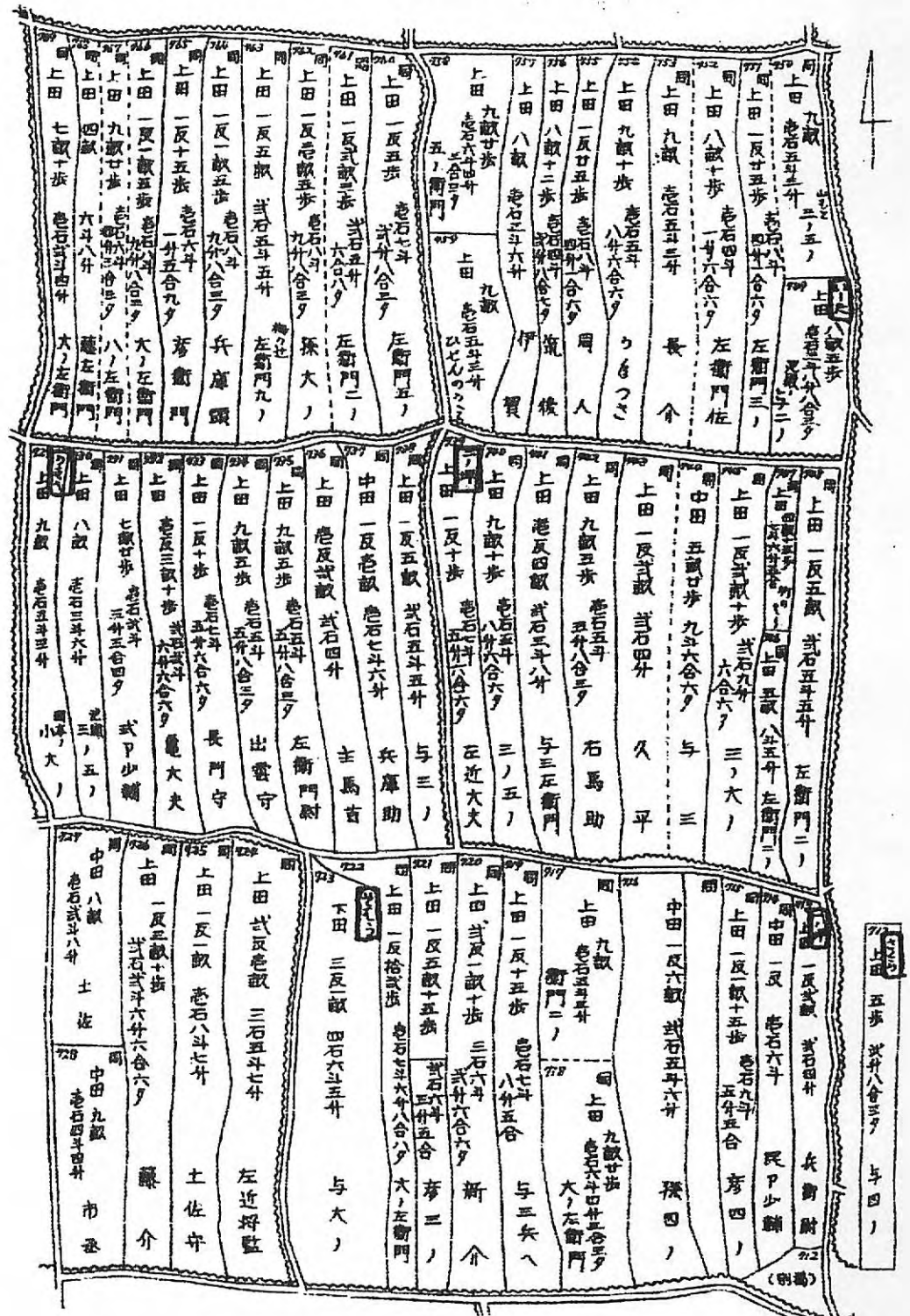
とするなら、作田分布図はこういう形にはなりません。半径1.8kmないし2kmの圏内は耕作可能範囲であり、且つその限界であったと見て間違いのないと思います。試みに鎌倉末期以来賀茂社の氏人が140人を定員として5反ずつ支給されていた一種の給田である往来田について、これと同様な方法で分布状況を地図化してみますと、往来田は上記の限界を越えてもっと外側、例えば中村郷ですと下鴨神社のすぐ北あたりにまで分布していることが判明します。小山郷や大宮郷についても同じような現象が指摘できます。往来田は氏人が当該田地から得点を収取する権利を与えられている田地であって、自らそこを耕作するわけではなく、耕作は別に作人がいて行い、一定の上がり分を氏人に提出するといふものですから、そういう現象が地図に現れるのは当然のことなのです。これを資料⑧と対比すると歴然たる差違があり、その差違は天文の検地帳所載の作人が原則として直接耕作者であるという上記の私の見方を補強するものと考えます。

このことと関連してもう一つ資料⑨を見ていただきたいと思います。これは記載したとおり、天正十七年(1589)に豊臣政権が上賀茂社領に実施したいわゆる太閤検地の検地帳の一部を地図化したものです。太閤検地帳には当社領の中世の検地帳と違って「次ノ西」「次ノ東」などという方角記載は全然記されていませんが、ただ田地の在所として小字名は記されています。それでその小字即ち「一ノ坪」なら「一ノ坪」、「二ノ坪」なら「二ノ坪」ということで、天文の検地帳あるいはよりさかのぼって宝徳の地がらみ帳の復元図と対比し、また他の近世・近代の田地図なども合わせて利用しますと、中世のものと同じような検地帳復元図を、太閤検地帳についてもある程度まで作ることが可能になります。その結果の一部を示したのがこの地図です(かつて「山城上賀茂の天正検地」という論文に掲載したものをそのまま引用しました)。

そこで、この田地図に記載されている作人名をNo.712の田地から順に見ていきますと、その中には氏人が名乗ることを認められていた受領などの官職名や仮名(けみょう)などがかなり出てくることが判明します。即ち兵衛尉・民部少輔・左近将監・土佐守・市丞・式部少輔・亀大夫・長門守その他で、合計すると確かなところで17名に達することが知られます。氏人が出てくる田地の多くは中世には往来田であったことも、天文十九年の検地帳復元図と突き合わせることによって確かめられます。他に賀茂社供僧であったと見られる土佐・筑後・伊賀などが出てくことも注目されます。両者合わせてここに登場する作人(請作者)全体の凡そ35%に達するのですが、彼らは中世においては基本的に得点収取権者であったはずの人々で、例外がなかったわけではありませんが、直接耕作者ではなかった場合が多いと見るべきですから、そうすると、太閤検地に於いてはかつての得点収取権者たる人々を、田地全体の3分の1ほどについて請作人として登録していたとみなされるのです。中世の賀茂社の検地とはかなり違っているなということになります。

もう半世紀も前のことになりますが、安良城盛昭さんが東大経済学部の卒業論文に基づいて、昭和28年(1953)「太閤検地の歴史的前提」(『歴史学研究』163・164)という論文を、さらに翌年には「太閤検地の歴史的意義」(同上167)という論文を発

⑨ 天正17年城州愛宕郡賀茂検地帳復元図 (部分)



凡 例

地割線ハ字限図ヲ模写シタモノデ  
決シテ厳密デハナイ。

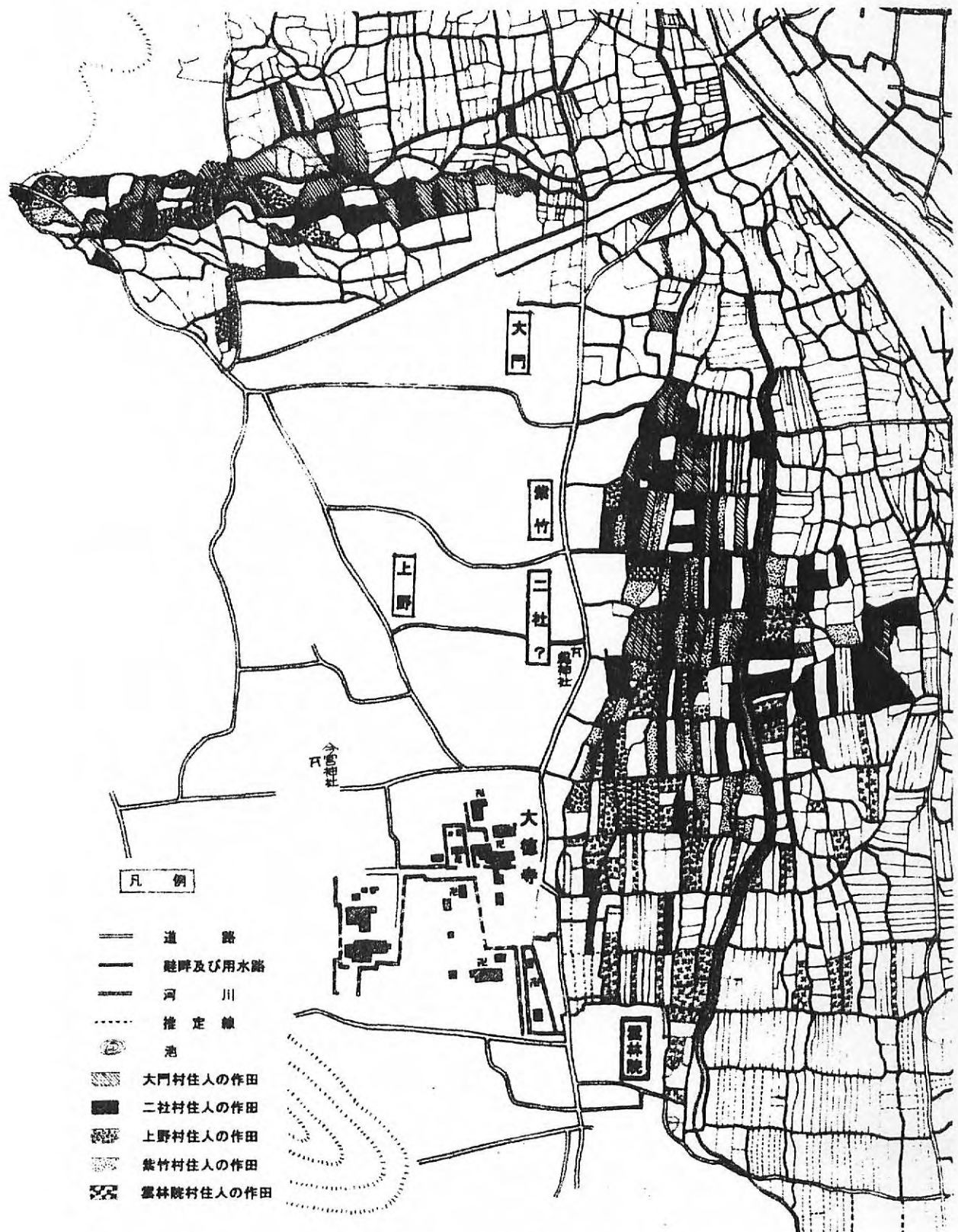
表されました。その内容は当時の日本史学界ことには中世史研究者に対して「聳動的」影響を及ぼしたといわれ、その後のいわゆる太閤検地論争のきっかけを作ったものとして有名です。そこでの安良城さんの主張は、太閤検地＝封建革命説として知られるもので、経済的先進地域である畿内地方では、室町期になると、荘園領主の検注帳に零細小農民が登場するようになり、荘園領主も彼らを年貢負担者として直接把握する方向へ移行するようになるが、これはなお「荘園領主のヘゲモニーに依る上からの封建的移行」つまり封建的進化の反動的な途に過ぎず、日本の中世は基本的にはあくまで家父長制的の隷属制社会であった。太閤検地はそういう状態を克服し、「作あい」つまり中間搾取を排除する政策を推進することによって、零細小農民の自立を促進し、彼らを検地帳に登録して年貢負担者として確定し、農奴制社会＝封建社会を成立させた革命的意義を持つものであったというものです。しかし、私には上賀茂社領に於ける中世の検地と同じ地域の太閤検地とを対比してみると、この安良城さんの理論をそのまま納得することは無理に思えるのです。限られた地域の実例に過ぎないとは言え、上に述べたとおり、中世後期の上賀茂社領では、明らかに直接耕作者を作人として検地帳に登録しており、一方太閤検地帳では「作あい」取得者であるはずの氏人や供僧がかなり高い割合で請作者となっているわけですから、史料の上では安良城さんの理論とはむしろ逆の現象が現れているといわざるを得ないのです。どういう事情がそこに伏在するのか、上賀茂の太閤検地については今後さらに慎重に検討してみたいと考えております。

時間があまり無くなりましたが、次に資料⑩の地図を見ていただきたいと思います。中央下部西寄りに大徳寺が見えますが、その門前からずっと北の方へ大徳寺通が通っております。これは遅くとも中世後期以来ほとんどそのままの形で残っている道路ですが、その道路沿いに地名を線で囲って幾つかの集落の所在を示してあります。北から大門村・紫竹村それから少し西へ寄って上野村、東側に二社村、いちばん南で通りの東沿いに雲林院村と並ぶのですが、いずれも中世後期にはその場所に存在していたはずの集落であり、その名称のほとんどは現在も町名として伝えられています。すでに触れたとおり、天文十九年の検地帳では、ほぼ網羅的に作人の在所在が記されていますから、その当時これらの村々の住人がどこに作田を持っていたかということをいちいち調べて、集落単位に塗り分けて図示したものがこの資料です。これらの集落に居住していた作人の人数は、それほど多い数ではありません。検地帳で調べた限りでは、大門村は18名出てきます。紫竹村は11名、上野村は10名、二社村は12名、雲林院村は多少不正確ながら20名くらいの作人がいたと見られます。この人数はこの場合戸数と見ても差し支えないと思いますが、その程度の集落が点在していたということになります。そこで、彼ら住人の作田がいったいどういうふうに分布しているのだろうかということで、村ごとに田地の塗り分けをしてみたのです。

これには実はある目的があったのでして、私の知る限りの地図ではどこにも見あたらない二社という村がどの辺にあったのかをなんとか突き止めたかったのであります。この村の名前は、私の見た範囲の史料では、江戸時代になると全然見当たらなくなります。どう



# ⑩ 大宮郷近辺諸集落住人の作田分布



○天文19年河上郷・大宮郷・小山郷検地帳による。

も太閤検地の時の村切りでたぶんすぐ北の紫竹村と合わせられたのではないかと私は推定しているのですが、とにかく江戸時代の史料からは村名が消えてしまうのです。そのためどこにあった村なのかが判らない。それならばなんとかその場所を突き止められないか、そのためにはここに住んでいた人たちの作田の分布状況が役立つのではないかと、そういうことを考えて作ったのがこの地図です。原図は色で塗り分けたのですが、本稿では印刷の都合上モノクロでなんとか区別しようと試みました。結果はご覧の通りで、あまり鮮明度が高くなく見にくくて恐縮ですけれども、これを使って説明を致します。

二社村住人の作田は黒く塗りつぶしてありますので、確かめていただきたいと思います。最南部では大徳寺の門前にまで散在しており、北では河上郷の西南部地域にも広がっております。しかし中心は大体総神社の東部及び東北部辺りということになると思います。これを他の村々の場合と比較してみますと、南に離れている雲林院村の作田は、大宮郷最南部に散在していて、他の4か村との共通性は認められないことが明らかですが、残る4か村は分布状態が似通っていることが判ります。ただ、中ではやはり大門村住人の作田が最も北に偏する形をとっており、濃厚な共通性が見て取れるのは紫竹・上野・二社の3か村ということになり、さらにいえば、上野村住人の作田分布が最も二社村のそれに近いと思われます。但し二社村の場合は、上野村のそれに比して、より東側に出ている様相が指摘できます。ここで念のために、上記4か村の住人が大宮・河上両郷以外に作田を所持している事態が考えられるかどうかを、地図の上で探ってみますと、わりあい近いところで田地があったと認められる地域としては、船岡山のもっと西の方で、大北山村の谷合辺りくらいしか見つかりませんが、ここは二社村などからは離れすぎていて、そこまで作りに出ていたとは到底考えられません。そうとすれば、二社村などの住民の作田分布は、ここに図示した範囲に限られると見てよいことになります。すると、ここの諸集落の所在地は大体それぞれの集落の作田分布範囲の扇の要に当たるところと考えられますから、二社村の場合は図に示したように、総神社の近辺で上野村よりは東側であったろうということになります。作田分布状態から帰納的に判断して、私は中世にはこの辺りに二社村が存在したと考えてほぼ間違いなかろうと思っているのです。

復元図の完成はかような判断を可能にしました。同様の地図の作成は上記以外の村々についてもできます。例えば北の河上郷関係では、中世には西の山麓に沿って川上あるいは原・今原・鎮守庵などという小規模集落が点在していたのですが、これらの村に関しても同じように作田の分布形態を図化することが可能です。これは明らかに復元図がもたらした一つの成果であると思っています。そして、ついでに申しますと、資料⑧の社家町居住作人層の作田分布図とこの資料⑩の地図とを組み合わせると、上賀茂という地域に於いて社家町が占める地位が歴然と地図化された形で窺えることになると思うのです。つまり上賀茂の地域に於いては、社家町は中心都市的な性格を持っており、社領の周縁部に散在している二社とか大門・紫竹、あるいは川上とか原などの小規模集落は、社家町を中心にしたいわば衛星的存在であるということが言えるのではないかと思います。今後上

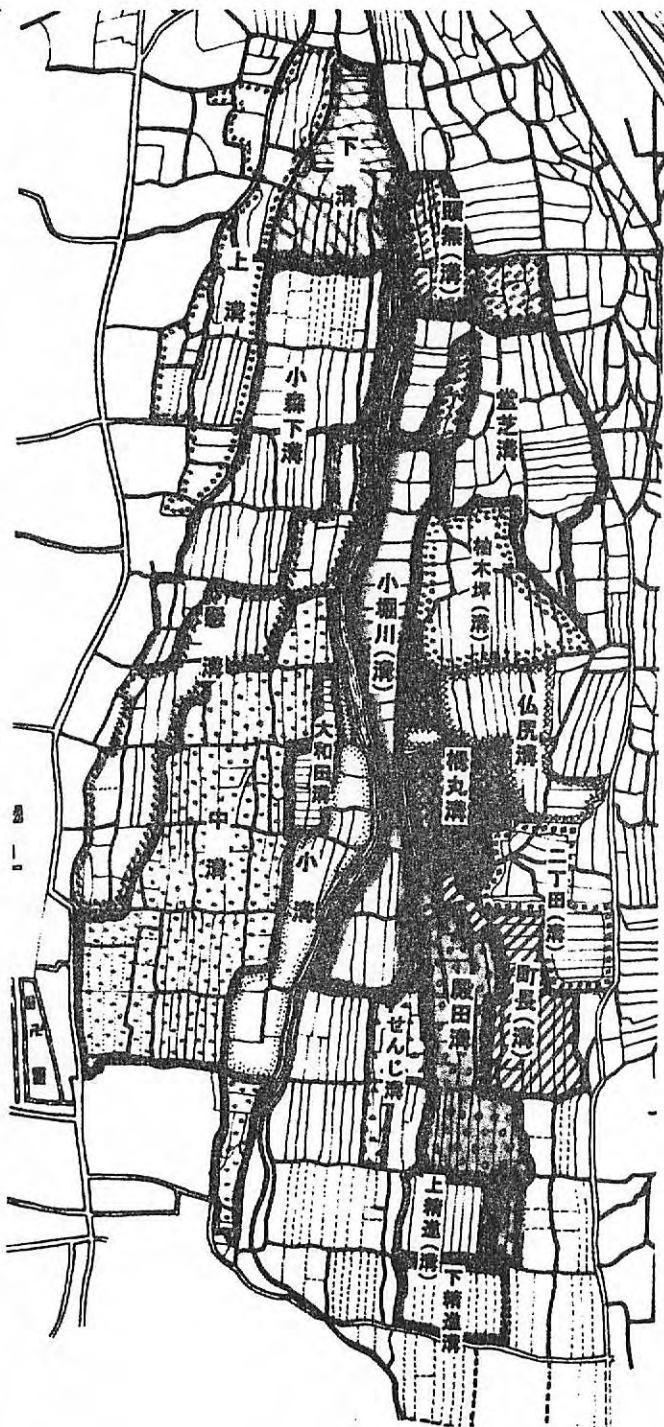
賀茂の中世の歴史、あるいは近世の歴史を見ていく場合、こういうことも考慮に入れておく必要があるものと思うのです。

それから、お終いになるのですが、資料⑩を見て下さい。これもまた復元図を基礎に一つの操作を致しまして、大宮郷について別の面からの考察を試みた結果です。左側の a 図は先ほどの場合と同様に同郷の田地の白地図をベースにして、表題に示したとおり、用水系統別に田地をグループ分けしたものです。天文十九年の検地帳では、少なくとも大宮・小山両郷に関しては検地が用水系統別に実施されています。諸郷の田地復元図を作る過程で、初めてはっきりとこれは用水系統別の検地であるということを認識することになったのですが、その様相を塗り分けによって示しますとこういう状況が浮かび上がってくるのであります。これを見るための参考として、右側に b 図として旧大宮郷近辺の等高線の状況が判る地図を掲げました。この辺りは現在ではほとんど全部市街地と化しておりますので、現在の地理調査所の地図などではそういう地域の等高線は省略されていて見ることはできません。そのためここに示した地図は昭和24年(1949)当時のもので、等高線を辿れる限りで少し太めに薄い色で塗って分かりやすくしました。この地図の下半部中央に囲いで示してあるのが旧大宮郷域です。ご覧のようにこの辺りの等高線の走り方は、大体大徳寺通より西側では、やや蛇行しながらですがほぼ南北方向に走っています。ところが、大宮郷域に懸る辺りになると大徳寺の西から船岡山へ懸けての付近を要にして、あたかも扇を右側へ開いていくような案配に少しずつ東側へ寝る形になっていることが判ります。即ち旧大宮郷域の土地は、西北から東南に懸けて緩やかな傾斜を示しているということです。この状況を a 図に示した天文当時の用水系統別田地区分図と照らし合わせていただきますと、大宮郷の用水は土地の傾斜を巧みに利用して溝を引いており、それぞれの溝の東側の田地がこれによって灌漑されていたことがはっきり掴めると思います。堀川の東南部では傾斜の様相が変わりますから、各用水路が常に東側の田地を灌漑していたとは一概には言えませんが、堀川より西ではこれははっきり見て取れることです。水が高きより低きに流れるのは自然の理ですから、これはまったく当たり前のことを指摘したに過ぎないのではありますが、検地が用水系統別に行われる例があるということは、おそらくこれまでは指摘されていなかったことだと思いますし、上賀茂社領の復元図ができた結果、その様相をはっきり地図化して示すことができることになったのも、やはり一つの成果といえるのではないかと、まさしく我田引水ながら愚考しております。こういうことで、幾つかの事例を示すことしかできませんでしたが、私が作成致しました復元図は、他にもなおいろいろと利用可能な要素を含んでおり、今後に役立てていただくことができるのではないかと考えております。

少し時間を超過したかと思いますが、また雑な話し方しかできなくて恐縮ですが、私の受賞研究の中身は大体こういうことであるということをご理解いただけたかと思います。これで、終わらせていただきます。どうもご静聴有難うございました。



⑪ a 天文19年大宮郷における  
用水系統別検地の様相

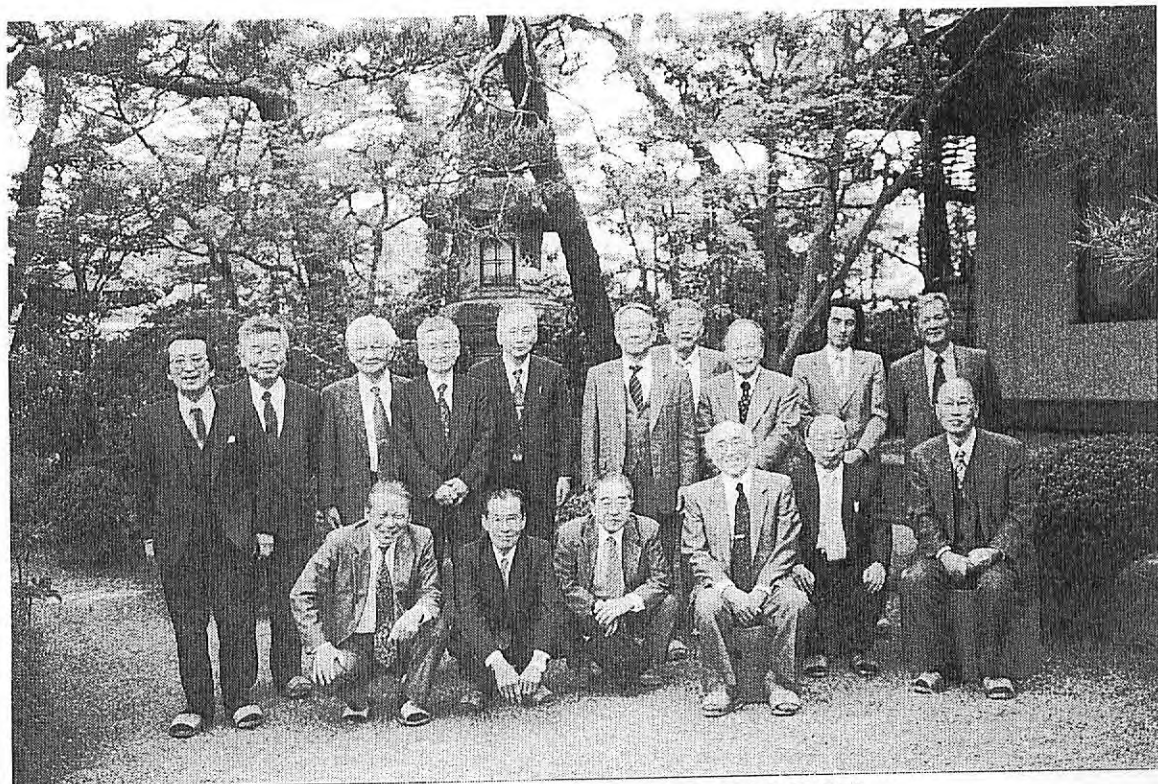


⑪ b 大宮郷近辺の等高線

(1949年7月28日発行2万5千分の1地形図を利用)



[付記] 本稿は、2004年10月24日に執り行われた祖先祭当日の講演を、録音テープを拝借して筆録した上、再検討しながら書き改めたものである。講演内容は、学士院賞受賞記念ということが関係して、昨年7月に名古屋での南山大学主催講演会に於いて話をしたことと大同小異であり、そのため本誌の編集に当たられた同族会評議員梅辻諄氏から講演録を掲載するようお願いをいただいたとき、かなり躊躇したのであるが、たつてということではかような形で御掲載をお願いすることになった。大方のご寛恕をお願い申し上げたい。なお、名古屋での講演の内容は、『南山経済研究』第19巻第3号に掲載されているので、必要の場合はご参照いただきたい。



平成16年4月11日 (財)賀茂県主同族会

会員須磨千穎殿 学士院恩賜賞受賞記念祝賀会 於京都・岡崎・白河院